

病弱特別支援学校に在籍する心理的な課題を抱える子どもの 「自分らしく生きる力」を育む実践的研究

北岡 大輔¹⁾ 西田 涼²⁾ 田端 友梨²⁾ 佐々木 渉²⁾ 櫻井 多岐子²⁾
橋爪 巳希²⁾ 松下 香好²⁾ 岡 潔²⁾ 森脇 碌³⁾ 宮本 裕也⁴⁾ 入學 遼治⁴⁾

1)和歌山大学教育学部 2)和歌山県立みはま支援学校

3) TETAU 事業協同組合 4) 和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻

1 問題と目的

本校は和歌山県内唯一の病弱特別支援学校である。近年、病弱特別支援学校では心身症や精神疾患のある子どもの在籍が増える傾向にあり、本校も同様の状況にある。在籍する子どもが抱える心理面の課題は多様化してきており、その教育的対応を学校全体で検討する必要性が高まっている。とりわけ、自尊感情の極端な低下が見られる子どもも少なくないことから、「自分らしく生きる力」を育むことが喫緊の課題となっている。

本研究では、①子どもの情緒面及び行動面の発達や課題の包括的なアセスメントと、そのための教員の資質向上、②子どもの心理的課題に応じた学習指導の在り方、③子どもの主体性の向上を意図した ICT 等支援機器の効果的な活用、④社会の変化に応ずる障害のある人の新しい働き方を含めたキャリア教育の指導、の4点を検討する。校内で分掌・学部を越えた協働研究チームを編成し、協議・実践を行うことにより、病弱特別支援学校における系統的・包括的な指導体制を構築することを目的とする。

2 本年度の取組

自尊感情が低下している子どもたちは、生きづらさの中でなんとか自分を守ろうとして無意識に身につけた反抗的な態度や挑発、暴力・暴言など「他者に受け入れられにくい表現方法」を変えられずにいる。教師の何気ないアドバイスにも「教師の考えの押しつけ」と捉えてしまうことが多い。本校では、このような子どもたちの否定的な姿に惑わされず、まずはその奥にある願いや葛藤等を受け止めながら、彼らが安心できるように工夫し、様々なことに自ら挑戦できるような支援の方法を探っている。特に、発達障害の二次障害から生じる困難への働きかけを行う時には、「個人として認められている実感」が大切と考えている。

本年度は、主に本研究の目的①及び④に関連した内容について報告する。

1) 学部・学年・担当教科を越えた教員によるケース会議の取組

<ケース会議の概要>

本校では、一人一人の実態に応じた指導を展開するため、年間を通じて適宜ケース会議を実施している。ケース会議では児童生徒の指導の方向性を協議することに加え、その開催を通して、子どもに応ずる支援チームの構築も大切な側面と考えている。そのため、ケース会議のメンバーは担任や教科担当をはじめ、管理職や特別支援教育コーディネーター、養護教諭など、学部・学年を越えて多岐にわたる。児童生徒の実態や必要性に応じて、ケース会議のメンバーを柔軟に集めることにより、会議後も支援チームとして運用できるようにしている。それぞれの教員がそれぞれの立場から児童生徒を見取り、役割分担をしながら、その人、その立場ならではの方法で指導・支援することで、より高い教育的

効果が期待できると考える。

また、教員の中には病弱教育や心理的に課題を抱える子どもへの対応に経験が浅い者もいる。そのため、ケース会議への参加を通して、ベテランの教員による子どもの見取り方や、指導・支援の工夫に触れ、専門性を高めることができるようにしていくことも意図している。

<結果と考察>

ここでは、2名の児童生徒を対象として実施したケース会議の例を挙げる。対象となった児童生徒はいずれも今年度から本校に在籍している。入学時は両名とも反抗的・挑発的な言動が多く、授業に向き合うことが困難な状態にあった。不適応の症状を緩和するためには、まず本人を受容し、児童生徒が示す言動に対してネガティブな捉え方よりもポジティブな捉え方をすることが求められる。しかし、入学当初は児童生徒の実態把握や情報交換・共有が十分ではなく、担任、教科担当教員それぞれが試行錯誤しながら対応に追われている現状であった。

そのため、「本人の成長についてフォーカスする（他の児童生徒ではなく、これまでの本人と比べてできるようになったところは?）」「ネガティブな捉え方ではなく、ポジティブな捉え方で児童生徒を見立てる（できていないことをできるように、ではなく、どんなことならできているか?なぜできているのか?）」という肯定的な捉え方を協議の軸とし、担任、各教科担当、対象児童生徒との関わりがあるその他の教員による情報交換、共有を行った。この時には、それぞれの教員による児童生徒の見立てや試行錯誤しながら行ってきた指導・支援、そして、そのことによる児童生徒の反応が詳細に語られた。ある教員による児童生徒についての見立てや指導・支援についての語りが、自身の考えと同じ方向であればより自信を持って取組を進めることができ、異なった考えであればより多面的な児童生徒理解につなげることができる。このようなことを通して、児童生徒の内面の様相や効果的だった関わり、控えた方がよい関わりなどを明確にすることにつながった。

一方で、それぞれの教員にとっては「自分の授業でも同様の支援を試みよう」と授業に対して次の一手を得たり、うまくいかなかったエピソードを聞くことで、「うまくいっていないのは自分だけではない」「他の先生も苦労するほど、実態の見立ての難しい児童生徒だ」と共感を得たりする機会ともなった。

情報交換、共有をしていく中で、授業場面や活動の内容、担当する教員によって、児童生徒が振る舞いを変化させていることが明らかになった。このことについても、肯定的に捉え、「相手によって、児童生徒自ら自己調整をする度合いを変化させている」「相手によって振る舞いを変えられるということは、不適応の症状を緩和する段階としては順調にステップアップしている」という成長の伸びしろとして共通理解を図ることにつながった。そして同時に、教員によってその子との関係性が異なって良いことを認め合い、かつ、それぞれの立場だからこそできることを明確にし、役割分担を図れたことは成果として大きい。

また、ケース会議では、児童生徒の行動を全て無条件に受け入れるのではなく、本人の目標に照らして「どこまで受容するか、本人の自己調整をどのように引き出すか」といった観点についても検討した。例えば「本人と事前に授業を抜ける際の合図を決めておき、本人が主体的にその合図を用いて授業を抜けた場合は、うまく自分で伝えられたことを褒

める」など、「授業を抜ける」という行動であっても、本人の主体性を育てる大切な機会であることを確認することができた。

不適応の症状を改善させるためには、本人が周りに支えられている実感、すなわち知覚されたソーシャル・サポートを得る必要があるとされるが、このことは、それぞれの児童生徒を支える教員についても同じことが言える。ケース会議を通じて、前述の通り教員自身も知覚されたソーシャル・サポートを得ることができたことは意義が大きい。

また、「本人の成長についてフォーカスする（他の児童生徒ではなく、これまでの本人と比べてできるようになったところは？）」「ネガティブな捉え方ではなく、ポジティブな捉え方で児童生徒を見立てる（できていないことをできるように、ではなく、どんなことならできているか？なぜできているのか？）」という肯定的な捉え方は、不適応を防ぐとともに、その症状を改善するために有効な考え方であることが、これまでの本校での取組で明らかになっている。しかし、教員の入れ替わりに伴って、そういった考えを継承することの難しさも課題となっている。今回のケース会議では、不適応を防ぎ、その症状を改善していくための児童生徒の見方を共有でき、不適応の症状を助長する不適切な環境要因を減らすことができたと考える。

さらに、本校の勤務経験の浅い教員からは、「経験の長い教員と、対象児童生徒とのやりとりやアプローチのしかたについて情報交換・共有を行うことで、自身にない言葉かけや対応のしかたを知ることができ、視野が広がった」という感想が得られた。

2) 新しい働き方を含めたキャリア教育の指導

<本校におけるキャリア教育の現状と課題>

本校の高等部（通学生）の進路先は福祉サービスの利用から大学進学まで幅広い。過去の卒業生の状況は、進学・就職・福祉・その他と4種類に分類すると、ほぼ同割合の人数となっている。「その他」に含まれる内容としては、自宅療養や継続入院といった身体的な医療を継続するケースから、精神的に不適応にある状況が継続して在宅の状態のケースなどがある。

また、近年では中学校段階までに不適応の症状を示し、不登校を経験した生徒も多く在籍している。高等部入学後もなかなか登校できない生徒や、登校しても集団での授業が受けられず、別室対応が必要な生徒も一定数いる。

<生徒の実態に応じたキャリア教育の取組>

以上のような課題を抱え、本校としてもこのような実態に応じた新たな進路先や支援機関を模索していたところ、TETAU事業協同組合の情報を得た。TETAU事業協同組合は「世界でいちばん凸凹なデザインファーム」として活動している組織である。「てたう」＝「手伝う」「手を伝う」という名前の通り、ICTとクリエイティブを用いて、企業などの組織の課題解決への伴走を行う。課題解決や価値創造は特定の人たちが活躍するだけでは実現できない。そのため「誰でも学べる地域を」というビジョンを掲げ、特に子育て・介護・障害・療養中など働くことに課題を持った人たちに学ぶ機会を提供している。ICTやクリエイティブのスキルを実践的に身につける機会を通して、「互立」できる働き方を身につける人を増やす。オンラインを活用して全員が家で働くフルリモートワーク、時間に制約が少ないフルフレックスという働き方を提案している。

まずは、県内のB支援学校がこのTETAU協同組合を外部講師として招聘していると

いう情報を得たため、B 支援学校に授業見学を依頼した。その際には、肢体不自由のある生徒がオンラインでフリーランスのデザイナーとやり取りしながら、製品の企画について生き生きと活動しており、このような「新しい働き方」は本校生徒にとって非常に有意義な情報提供になると感じた。そこで、校内で協議し、令和 5 年度は高等部 2 年生が受講する学校設定科目「産業社会と人間」への外部講師を TETAU 協同組合に依頼した。TETAU 協同組合を招いての授業は月に 1 回程度実施した。実施した授業のうち、本研究に関わるものを抜粋し、表 1 に示す。

表 1 「産業社会と人間」で実施した授業
(キャリア教育を主とする内容の抜粋)

自分を語る 20 の項目
あなたの考え方チャートを作ってみよう
仕事って何だろう★
自分らしさ・わたしの好き★
仕事に対する自分の価値観を知ろう★
どうやったら実現できるかな?★
職業について考えよう
インターネットを使って実現できること★
求人情報について

★TETAU 協同組合を招いての授業

TETAU 協同組合の森脇氏は授業において、次のことを大切にしていると語っていた。

自分を知ること、自分を伝えることを大切に授業を行っています。わたしたちは自律した働き方を学ぶ場を運営しています。子育て、介護、障害、療養など働くことに課題を持つ人にとって、フレックスワークは生き生きと生きていくための選択肢になりえます。時間や場所などに囚われない自由を得るためには、誰かに与えられるのではなく、自主的に動くことが必須です。

学びのプロセスの中で最も大きなハードルはスキルを身につけることではありません。実はもっと手前にあります。それはメタ認知とコミュニケーション。仕事にとって、「なんでもかんでもできるようになること」は本人が思っているほど意味のあることではありません。重要なのは、「自分のできること、できないこと、好きなこと、嫌いなこと」など「自分の形」を相手に伝えること。パズルのピースさえ合えば、人はお互いに協力し合うことができます。

正解かどうか確認できないと行動することができない。ネガティブなことを隠そうとする。フィードバックに対して必要以上に感情的になる。誰かに褒められるなどの外的要因がないとモチベーションを上げることができない…

メタ認知とコミュニケーションの不足は、自律的に学び続けることを難しくします。しかも大人たちはこれまでの経験を払拭するためにマイナスからのスタート。これまでの考え方を変えるためには多くの時間を要します。安心・安全な場で練習ができる子どもうちに自分自身を大切にできること、思ったことを相手に伝えていく技術などをしっかり備えて、社会に出てもらいたいと思っています。それさえできればほとんどの課題を自分で解決していくことができると考えています。

<結果と考察>

授業の中で、「自分らしさ・わたしの好き」について尋ねられた生徒は「時間：ゆっくりしたい。早く行動するのは苦手なので」「生活の中で大切にしたいこと：趣味の時間、睡眠時間」「モチベーション：やっているものにもよる」など、自分の想いをワークシートに自由に記述している（図1）。また、「仕事に対する自分の価値観を知ろう」をテーマにした授業での生徒のワークシートを抜粋したものを図2に示す。この授業では仕事に関わるいろいろな項目に対して自分の想いや考えを記述した後、それらの項目のうち大事にしたいものから優先順位をつけた。Aさんは「職場には同年代の人がいればいいな」、Bさんは「土日に休んで趣味の時間があれば」と考えながら自分の大切にしたいことを考えていた。

自分らしさ・わたしの好き		
趣味 好きな作業	絵を描く	絵を描く
時間	ゆっくりしたい。速く行動するのは苦手	
場所	家以外のところで仕事をしたい	家から近いところ
スピード	できればゆっくりめがよい。やけに動きたい日もあるので、少しまどろみを感じ	一つの作業をしている間にあれこれ言われるのは嫌い
コミュニケーション 人間関係	同僚はほしい。男友達も女友達も同好ほしい	
モチベーション やる気	職場などの環境でそううつなどになったらやる気を失う	やっているものによる
やりがい	家族の支えになれたらよい	
生活の中で 大切なこと		趣味の時間、睡眠時間
お金	そこそこよい給料	あるていど貯めている

図1 自分らしさ・わたしの好き

仕事に対する自分の価値観を知ろう			
Aさん		Bさん	
7	業務内容	単純作業	○○(企業名)
9	時間	1-2時間毎その日の体力・精神にもよる休憩時間20-30分程度	中間
6	場所	できれば家から近い方がよい	家から近い
2	スピード	早くも遅くもなく中間	速すぎず遅すぎず
1	コミュニケーション 人間関係	同年代ぐらいの人がいたらよい	話しやすい人が多い
4	モチベーション やる気	趣味と休む時間に限る。やる気はありがとうって変われるとか	モチベーション やる気
	ポジション 責任		品出し、レジ係
	生活との 兼ね合い		生活との兼ね合い
	報酬		定休がある(例：土日休み)
			安定した給料

数字は生徒本人の大切にしたいことの優先順位

図2 働くときに大事にしたいこと

この授業の中で「働く」というキーワードがよく出てくる。本校の生徒の場合、決められたことを達成することが苦手で不安を抱く者もいる。また、「働く」ことに自分を合わせていくだけだと、しばらくは適応して働けているように見えても、本人にとっては過剰適応となり、自分の想いと乖離に離職し、立ち直るまでに多くの時間を要する場合もある。一般的に進路指導では、本人に「あなたは何になりたい?」「将来何がしたい?」を考えさせるところを自己選択のスタートと位置づけるイメージがあると感じるが、自分のことを肯定的に受け入れられない状態でこのような願いや想いを抱くこと自体、課題が大きい。森脇氏は授業の中では、働くことを考える際、「あなたは何が好き?」「職場に求める条件は?」など本人の想いを出発点にして、自分が働くなら何に重きを置きたいかを具体化していく流れで進めていた。「働くため(○○になるため)には○○ができるようにならなければ」という発想や、「働く=決められたことをする」というイメージを一度瓦解し、「働くこと」に照らして、生徒の想いを引き出したり、自己理解を促したりする取組は、心理的な課題を抱える本校の生徒にとって、好影響を与えることが期待される。

3 総合考察

病弱特別支援学校に在籍する心理的な課題を抱える子どもたちは、周囲の環境と自分とがうまく噛み合わなかったこれまでの経験から、自分には能力がない、何をやっても無駄だという自己認識に陥ってしまっていることが多い。そのため、まずは受容することが支援の土台となるが、これだけでは子どもたちの主体性の育ちには結びつかない。「個人として認められている実感」を得られるようにすることを始点として、その上で一歩ずつでも自分を自分で導いていこうとする力を育てることが肝要となる。

本研究におけるケース会議とキャリア教育では、いずれも、子ども自身の想いを受け止めることを重視するとともに、その本人の想いに応じて指導・支援を検討し、本人が自らを導いていこうとする意欲を高められることを意図した取組を行ってきた。ケース会議の取組では、教員がそれぞれの立場で本人を受け止め、本人との関係を構築したこと、そしてそれぞれが取り組んでいる指導・支援を明示化し、教員間で共有したことが、本人にとって安心できる支援チームの構築を促進した。また、キャリア教育の取組では「なりたい仕事は?」「そのためには?」からのスタートではなく、「働くときに自分が大切にしたいことは?」など、職種・業種を限定せずに、まずは「自分」と「働くこと」を結びつけ、自分の想いに気づく段階を大切にすることで、子どもが自らの率直な想いを表現できることにつながった。

このように心理的な課題を抱える子どもへの教育的対応においては、受容する段階から試行する段階へと教員の指導・支援を移行させていくことが重要となる。本研究では、その一端を試行的に検証したが、その具体的な手順を体系化することや、教員間で方向性を一つにして取り組む枠組みの構築にはまだ課題が多い。また、今回は本研究の目的の①、④を中心として取り組んだが、②、③については取り組みを進めている段階で分析には至っていない。これらのことは次年度以降の研究の課題である。